

「生きる」とは「食べる」と

私の祖父母は農業をしている。我が家にはお祝いや特別なことがあったとき、収穫したもち米でお赤飯を炊いて食べる習慣がある。私は祖母が作るお赤飯が大好きだ。

小学五年生のとき、病気で食欲がなくなったことがあった。楽しいはずの食事の時間が次第に重く、暗くなっていく。精神的にも落ち込んでしまい、入院することになった。初めての病院食は、味をほとんど思い出せない。ただただ、一人の食事は心細く、「家に帰りたい——」と何度思ったか分からない。

不安で消えかかるロウソクの火のような私の心。ぼんやりとした意識の中に、突然、祖母のお赤飯が浮かんできた。家族で食卓を囲んできた温かくて幸せな時間。まるでマッチ売りの少女のように、甘くて素朴な、あの味を繰り返し夢見ていた。祖母の優しさが詰まったあのお赤飯なら食べられるのではないか。祖母のお赤飯が「食べる楽しみ」を思い出させてくれた。「食」は「人を良くする」と書く。「食べること」は「生きること」だ。私は再び生きることを選んだ。その後、少しずつ食べられるようになり、退院することができた。

それからの私は食事の時間を大切にするようになった。短い時間でも家族と一緒に食べる。特別な理由はいらない。時間を共有できること、ただそこに自分や家族がいる。それだけで幸せだと気づいた。何気ない日常の中にこそ感動はある。

高校生になった今でも、祖母のお赤飯が食卓に並んでいる。誕生日や学校行事にはお赤飯が一つ、二つ……。多くの人が思い描くごちそうではないかも知れない。けれど、私にはどんな豪華な料理よりもごちそうだ。

「いただきます。」

一口箸で掬って、よく噛んで食べる。口いっぱい甘さが広がる。おそろいの顔をして家族も笑っている。今日も手を合わせて「ごちそうさまでした。」

